2021.01.24 島根歴史講座　　於　松江テルサ

尼子家の「御一家再興」戦争と山中幸盛

山梨県立博物館学芸員 中野賢治

はじめに

戦国大名尼子氏　…尼子経久(1458-1541)によるドラマチックな「国取り」、大内氏・毛利氏との戦いがクローズアップされる

→晴久(1514-61)・義久(1540-1610)の評価は低い

義久が毛利氏に降伏した後、勝久(1553?-78)らが「御一家再興」戦争を展開

永禄 12(1569)年～天正 6(1578)、約 10 年の間山陰を中心に戦闘を継続

勝久軍の主力であった山中幸盛（鹿介、1545?-78）など人気が高い

…結果として滅亡してしまったため、関連資料に恵まれない

＋講談のイメージが先行し、歴史的な検討の対象となってこなかった

…『松江市史』通史編　中世で尼子氏の「御一家再興」戦争を扱う

戦国期　…いくつかの段階差、区分が提案されている

ex.「列島の戦国史」シリーズの編集方針

第１段階：15 世紀後半　足利幕府の全国支配が動揺しつつも継続している

第２段階：16 世紀前半　幕府の全国支配が崩壊、新秩序建設をめぐる覇権争いが展開

第３段階：16 世紀後半　地域覇権争いが決着、戦国大名同士の領土紛争から統一政権の誕生

第４段階：17 世紀初頭　全国政権の主導権争いを徳川氏が制する

経久は第１～第２段階、晴久・義久は第２～第３段階、勝久は第３段階

cf.甲斐武田家　武田信虎(1494-1570)は第２段階、信玄(1521-73)・勝頼(1546-82)は第３段階

…経久は伊勢宗瑞（北条早雲、1456-1519）と同世代、かなり早い時期に活躍した人物

(1)経久・晴久期の状況を概観、尼子勝久らが「再興」しようとした尼子家の姿

(2)尼子家の「滅亡」から勝久らによる「再興」戦争の過程

これらにより勝久らの「再興」戦争が持つ意味について考え直してみたい

１．尼子経久の勢力拡大と晴久の領国経営

(1)急成長する勢力　―経久時代―

応仁の乱後　守護京極家の内紛　→出雲守護代尼子清貞・経久の成長

永正 4(1507)年　京極材宗死去・翌 5(1508)年　京極政経死去

…経久、出雲国の支配権（「国成敗権」）を掌握

永正 11(1514)年　経久、横田荘の三沢氏を制圧　…出雲国の軍事的支配を確立

近隣の諸勢力の動向に呼応して勢力を拡大（大内氏に圧迫された但馬山名氏・安芸武田氏「支援」）

大永 3(1523)年　経久、大内方の安芸国鏡山城（広島県東広島市）を攻略、石見国那賀郡を制圧

…大内義興・義隆との戦いが全面化

大永 4(1524)年　日御崎社修造勧進簿【史料１】
　…将軍足利義晴の命により、出雲・伯耆（汗入・日野・相見）・石見（迩摩・安濃・邑智）・隠岐から棟別銭を徴収
　＝これらの地域が尼子氏の「勢力圏」　＋安芸・備後・備中国にも経久の影響力が及ぶ
　　…地域の国衆・有力者の服属による勢力拡大　＝「尼子領国」の範囲は判断できない
享禄元(1528)年　大内義興没　→大内義隆、九州で対大友氏戦争に注力、尼子方と停戦状態へ
享禄 3(1530)年　塩冶興久（経久三男）の反乱
　　…経久、大内氏・毛利氏などの支援により鎮圧に成功　＝関係改善
　　→天文元(1532)年　美作国への侵攻を開始
　　天文 5(1536)年までに美作・備中国を制圧、播磨国への侵攻を開始
天文 8(1539)年　このころ経久、安芸・備後をたびたび攻撃、多くの国衆たちを影響下におく
　　…毛利氏との対立激化
天文 9(1540)年　尼子詮久（晴久）、毛利氏の本拠吉田郡山城を攻撃（郡山合戦）【史料２】
→翌 10(1541)年正月に撤退
　…備中・備後・安芸・石見国の国衆たちが離反、大内方に転じる
天文 10(1541)年　詮久、将軍足利義晴の偏諱を受け晴久と改名
　　経久死去（84 歳）

「尼子経久による戦争は、周囲の予想を超えるような大胆な戦略と、相手の虚を衝く奇襲的な戦法が見られた点に、大きな特徴がある」、「大永七年の備後国和智合戦における陣城の配置（中略）、天文年間前半に展開された備中・美作・播磨方面や安芸・備後方面に向けた飛躍的な戦線の拡大などからは、当時においても周囲を驚かせるような特異で明瞭な経久の意志をうかがい知ることができる」

（『松江市史』通史編 2 中世 337～340 ページ、長谷川博史氏執筆部分）

(2) 組織化・集中・安定化　―晴久時代―

天文 10(1541)年　大内義隆、郡山合戦直後から出雲国侵攻を計画【史料２・３】〔中野 2014〕
→天文 11(1542)年 4 月　出雲侵攻開始
　　【史料４】「雲州国之儀、大内殿多分被任御存分候」
　　【史料５】「至雲・伯両州茂此比悉以平均被仰付候」
　　【史料６】「依其国中悉敵同意候、富田一城ニ成行候」
　　大内義隆、富田城を見下ろす京羅木山に着陣、攻撃を開始
　…尼子方の善戦により戦線は膠着、戦争の長期化により国衆たちに負担
天文 12(1543)年 5 月　大内義隆、撤退開始　＝富田城攻めの失敗
　　→出雲・安芸・備後・石見の国衆が離反、大内晴持（義隆甥・養子）戦死
　　晴久、伯耆国大田光千代丸に八幡宮新田 120 石を寄進
　　備後国の山名理興、安芸国の吉川興経ら有力国衆が尼子方に帰参
　　＝尼子氏の勢力回復・拡大へ

尼子氏の家臣団　…一門衆／京極氏以来の被官／出雲国衆／尼子氏直臣などからなる

基本的には京極氏のものを継承
→同じ京極家臣出身の多賀氏や幕府奉公衆の宍道氏などとの関係が課題
晴久：塩谷興久の反乱や大内義隆の富田城攻めなどを利用して排除に成功
天文年間から直臣の登用を推進、直臣層を拡大
複数の奉行人による組織的な体制への移行
（直臣の増加　→尼子氏直轄領の増加？　直轄軍の強化？）

天文 20(1551)年 8 月　陶隆房挙兵、山口へ侵攻
9 月　大内義隆、長門大寧寺で自害（45 歳）
→大友晴英（義長）が後継者として迎えられる
※隆房自身が大名となるわけではなく、表向きは大内氏が存続するかたち

天文 21(1552)年 4 月　将軍足利義藤（義輝）、晴久を因幡・伯耆・備前・美作・備後・備中国の守護に任命
京極氏以来の出雲・隠岐両国とあわせて 8 か国の守護職を兼帯
…伯耆・美作以外は尼子方の影響下にない　＝「支配の追認」ではない
吉田郡山城攻め・富田城攻めの失敗と国衆の離反
晴久は「ひとたび外部勢力の侵入を招けばたちまちに瓦解し、その本拠までの侵入を許すような国衆たちへの統制力の弱さを補うため、ありとあらゆる手段を模索していた」ものとみられる〔中野 2014〕
…国衆に依存する「伝統的」支配体制の行き詰まり
＋大内義隆の死　…有力家臣への過度な依存・委任の「弊害」
→経久時代の体制の見直し、自身の権力強化へ

天文 22(1553)年　晴久、備後・備中方面へ進出　…毛利元就に阻止され備後での拠点を失う
天文 23(1554)年 11 月　晴久、一族の尼子国久・誠久ら一類を処断（新宮党事件）
尼子国久：経久次男、塩谷興久の反乱以後に興久の旧領を継承、出雲国西部に勢力を拡大
…出雲一国の支配を目指す晴久にとって大きな障害

一族やそれに準じる有力勢力との対立：伊達晴宗（父稙宗と対立）・武田晴信（父信虎を追放）・
今川義元(異母兄玄広恵探を討つ）・島津貴久(一門の実久を破る)など
＝全国的にみれば珍しいことではない
・備後を喪失し、石見にも毛利氏が進出しつつある危機的状況への対処
・当主権力を代行しうる有力人物の喪失…戦線の拡大・多方面化のなかで軍事的機動性を失う結果

経久期：経久個人の能力に大きく依存し、国衆を従属させて成長
↓
晴久期：晴久が権力を掌握しつつ、その意を受けた組織による支配を目指す
＝「当主への権力集中」・「奉行人制度の整備」

２．雲芸和睦の破綻と尼子義久の降伏

(1)雲芸和睦の成立と破綻

弘治元(1555)年 10 月　厳島の戦い：毛利元就、陶晴賢を討ち大内氏旧領を接収(～1557)
…備中・石見で尼子氏と毛利氏の勢力が衝突するように

永禄 2(1559)年 2 月ころ　将軍足利義輝、尼子晴久と毛利元就との和睦を画策【史料７】

永禄 3(1560)年 5 月ころ　毛利氏：室町幕府に対して尼子氏との和睦の仲介を申し入れ
幕府からの使者として下向していた聖護院道増が雲芸和睦を扱う【史料８】

11 月　将軍足利義輝の御内書【史料９】・聖護院道増の起請文【史料 10】…停戦成立

12 月　尼子晴久没（47 歳)、義久家督継承
義久：晴久存命期から文書の発給を行うなど、後継者としての立場は明確
…この時期、毛利氏は北九州での大友氏との戦いに注力　＝停戦継続

永禄 4(1561)年 11 月　石見の福屋隆兼が毛利方の福光城を攻撃
→永禄 5 年　毛利氏、福屋氏の本拠である音明城を攻撃
福屋隆兼は城を出て逃亡、その家臣たちも謀殺
同じころ、多胡辰敬も毛利氏に敗れて戦死

永禄 5(1562)年 6 月　本城常光が毛利氏に降伏　＝石見の尼子方勢力が瓦解
出雲国赤穴の赤穴久清が尼子方から離反し、毛利方へ

毛利氏：福屋隆兼の福光城攻撃を雲芸和睦違反ととらえ、和睦の破棄を宣言、出雲侵攻を開始【史料 11】
…日野山名氏の山名藤幸を支援して伯耆方面からも尼子領国に揺さぶりをかけ、
備中の三村家親や因幡の武田高信らとともに尼子氏を包囲

(2)毛利氏の出雲侵攻と尼子義久の降伏

永禄 5(1562)年 7 月　三沢氏や三刀屋氏を始めとする出雲国衆の多くが毛利氏に帰属【史料 12】
→毛利元就・吉川元春、石見から出雲赤穴に入り、出雲攻略戦の指揮をとる

永禄 5(1562)年 8 月　毛利氏：鰐淵寺に寺領書立を与え【史料 13】、鳶巣城を支配下に置く【史料 14】
＝出雲国西部を制圧

永禄 5(1562)年 9 月　元就：三好長慶にあてた書状のなかで、毛利方が出雲中部もほぼ制圧したため、
尼子方の勢力は「富田一所にあい究まり候」とする【史料 15】
因幡の武田高信や備中の三村家親、備後の軍勢などが富田城に押し寄せる勢いをみせる
毛利氏の工作によって因幡・伯耆や美作方面では、次第に尼子方勢力が弱体化
尼子義久：日御碕神社に対して籠城戦の勝利を祈らせる【史料 16】
＝富田城への攻撃も開始

永禄 5(1562)年 10 月　元就：山内隆通に対して富田城攻略後の恩賞の追加を約束する【史料 17】
＝出雲制圧にはさほど時間はかからないという判断

永禄 5(1562)年 11 月　毛利氏：本城常光を宍道の陣所において討ち果たす【史料 18】
→毛利方に帰属していた熊野氏や米原氏、松田氏などが離反し、尼子方に帰参
大友宗麟が尼子義久と連携する動き【史料 19】

元就：【史料 20】宍道湖北岸の洗合崎に陣を置き、同時に和久羅山を制圧して城を構え、
富田城と島根半島とを分断して尼子方の松田誠保が籠もる白鹿城を攻撃する作戦
…毛利隆元を豊前へ転戦させざるを得なくなったことなどから実現せず

永禄 6(1563)年 7 月　尼子氏：伯耆国尾高・河岡両城を攻撃、一時は陥落の危機
＝西伯耆戦線は尼子方優勢で展開
毛利氏：備後の上原豊将を伯耆日野郡に出陣させ、尼子方を牽制
宮景盛、杉原盛重、山名藤幸らに命じて尾高・河岡両城の防衛にあたる
…尾高・河岡両城は毛利方が維持、尼子方は西伯耆への影響力喪失
永禄 6(1563)年 8 月　毛利隆元、北九州から出雲戦線に復帰する途中で急死（41 歳）
永禄 6(1563)年 10 月　毛利氏、松田誠保を隠岐へ追い、白鹿城を占領
…尼子義久は富田城と島根半島方面への連絡を絶たれる
永禄 6(1563)年 12 月ころ　毛利氏、隠岐を制圧
永禄 7(1564)年 2 月　伯耆方面で「兵粮留」の実施【史料 21】
…籠城中の富田城から毛利氏に投降するものも跡を絶たず
城内では和平（＝降伏）が取り沙汰されるように
永禄 8(1565)年正月　毛利氏：福良山城・十神山城を陥落させ、美保関・境に抑えの城をおいて中海を封鎖
熊野城の熊野久忠、毛利氏に降伏　＝尼子義久の勢力はほぼ富田城の周辺のみに
永禄 9(1566)年 6 月ころ　富田城からは毎日 50 人から 100 人もの脱走者が発生【史料 22】
永禄 9(1566)年 7 月ころ　安芸郡山城周辺に所領を持つ内藤元泰が「尼子方宿之儀」についての同心
＝水面下で義久の降伏とその後の処遇が検討
永禄 9(1566)年 11 月　尼子義久、弟の倫久・秀久らとともに毛利氏に降伏、富田城を退去
→義久一行は元就本陣の洗合城に送られ、年内には安芸へ下るように命令
その後、杵築で家臣たちと別れ、12 月 9 日に田儀へ至り、
石見の河井・出羽、安芸の横田を経由して 14 日に長田の円命寺へ
…軟禁生活へ（天正 17（1589）年に幽閉解除）

３．尼子勝久による「御一家再興」戦争

(1) 勝久軍の出雲侵攻

永禄 12(1569)年 5 月 17 日付米原綱寛宛大友宗麟書状【史料 23】
…尼子勝久らによる軍事行動の史料上の初見、勝久らの目標は「御一家再興」
毛利氏：6 月には「尼子牢人共」の「一揆之企」に対する注意を喚起【史料 24・25】
永禄 12(1569)年 9 月 15 日付日御碕検校宛尼子勝久寄進状・同家臣連署奉書【史料 26・27】
…「毛利」氏が「国中」に「乱入」したことで「既」に「当家」は「断絶」した、とする
「当家断絶之以来三・四ヶ年」　＝永禄 9 年の義久の降伏により尼子家は「断絶」した、という認識
…毛利氏に降伏し、幽閉されている義久の存在を無視

永禄 12(1569)年 6 月頃　但馬方面で勝久軍が蜂起、丹後・但馬の海賊の協力をうけて出雲忠山城・新山城へ侵攻

7月　毛利氏：北九州で大友氏と対陣中、主力を動かすことができず
竹矢を本拠とする野村士悦に対し、「富田現形衆」への工作を命じる【史料28】
北九州から出雲へ米原綱寛・坂元貞らを派遣【史料29】
天野隆重の指揮下で「静謐」のため働くように命じる
勝久軍：富田城を守る毛利氏配下の天野隆重軍と交戦、以後たびたび攻城戦を行う
8月～12月　勝久、出雲・伯耆の諸勢力に安堵状を発給
国衆らの不在という軍事的空白を利用して勢力を急速に拡大
…「雲伯忿劇」【史料30】
馬木・河本・湯原など出雲国衆が次々と勝久軍に参加【史料31】

(2)挙兵の背景と諸勢力の動向

毛利氏：1560年代後半、旧大内氏領国を足がかりに急激に勢力を拡大
→九州北部をめぐって豊後の大友氏と衝突、長期にわたる戦争に突入
←大友氏が中心となり、中国・四国にまたがる反毛利氏連合を組織
＝毛利氏包囲網（伊予村上、備前浦上、美作三浦など）を形成

大内輝弘の蜂起
永禄12(1569)年5月　大内輝弘（義隆の従兄弟）、山口侵攻の準備に着手
10月　大内輝弘、秋穂から山口へ侵攻、築山館跡を占拠
元春・隆景ら毛利軍の主力が北九州から長府へ着陣
→輝弘、周防富海で追い詰められ自刃

旧大内氏・尼子氏領国での旧家臣の蜂起
…毛利氏包囲網の形成、反毛利氏勢力の広範な存在、東西から毛利領国を圧迫
→勝久軍の行動を容易にするとともに、出雲の諸勢力に尼子家再興の可能性を認めさせる

(永禄12(1569)年)10月1日付富兵部大夫宛尼子氏家臣連署奉書案・同奉書【史料32】
…出雲大社（杵築大社）の上官（上級神官）である富氏が勝久軍に権益の保護を要求
勝久軍が示した「御寄進なされ、勝久御判形をなされ候」という原案に対し、
富氏が「晴久御判形の旨に任せ、勝久御一通をなされ候」と修正するよう要求
…晴久の安堵状（判形）を富氏が持っているかどうかは、富氏が主張しなければ勝久軍側にはわからない
＝この安堵状の発給は勝久側からの一方的なものではなく、受給者である富氏側が協力したもの
（作成のもととなった案文が、正文とともに富氏に伝存したことも興味深い）
→勝久の安堵状が発給される【史料33・34】

富氏は、晴久の「判形」だけでなく、義久の「判形」も所持している【史料35】
にもかかわらず義久の安堵でも勝久の寄進でもなく、晴久の判形を根拠とするよう要求している

勝久軍による諸勢力に対する安堵【表】

勝久が行う、いわゆる「継目安堵」において、義久のものを根拠とするものは確認できない

←義久も足かけ4年の短い統治期間のなかで大量の安堵状を発給している

富氏のように晴久と義久、両方の安堵状を所持している者が、勝久による「寄進」という形ではなく、

晴久のものを安堵の根拠とするよう勝久に求める

＝出雲の諸勢力が勝久軍を必要としていた

彼らは晴久期の秩序の回復を期待（≠直前の当主であるはずの義久期の秩序）

→勝久軍：「当家」は義久が毛利氏に降伏し、出雲を去った段階で「断絶」した、と位置づけ、

幽閉されている義久の存在を無視する必要があった

勝久による「御一家再興」の内実

…勝久軍および勝久軍の支持勢力にとっては、晴久時代の支配体制を再構築すること

そのためには富田城をなんとしても奪還しなければならない

（血筋を重視し、体制の変化や領域の違いを無視する近世以降の「御家再興」とは異なる）

義久期を否定し晴久期への回帰を望む諸勢力の要望に応え、その支持を得ることが「御一家再興」への道

（←諸勢力は毛利氏とも接触を持ち続け、どちらが勝っても自身の権益を確保できるようにする）

４.「御一家再興」戦争の展開と終焉

(1)第１期　出雲攻略失敗まで

永禄13（1570）年正月　毛利氏：赤穴から出雲へ入り、多久和城を占拠【史料36】

氷之上・禅定寺・阿用・福富などの要害を次々と落としつつ

三沢・横田を経由して布部に至る【史料37】

勝久軍：主力を布部要害に結集（『市史』中世Ⅱ1309）

永禄13(1570)年2月　毛利軍：出雲国布部で勝久軍に勝利（布部合戦）

勝久軍：末次城へ逃れ立て直しをはかる（『市史』中世Ⅱ1310）

永禄13(1570)年4月　毛利軍：勝久軍の牛尾要害を攻略　…以降、戦局は毛利氏優勢に傾く

元亀元(1570)年6月　森山城を守っていた秋上宗信が毛利方へ

→勝久軍の拠点が新山城・高瀬城ほか数か所のみとなる

元亀元(1570)年9月　毛利元就が病に倒れ、毛利輝元・小早川隆景らが吉田郡山へ戻る

→勝久軍：十神山城を占領、富田城・神西城を攻撃

元亀元(1570)年10月　勝久軍：満願寺山を占拠して築城【史料38】

…新山城と高瀬城の連携を確保しようとしたものか

毛利軍：温泉津・宇龍・加賀など海側の要所を制圧（『市史』中世Ⅱ1406～1410）

＝日本海および宍道湖・中海の制海権を奪回

元亀元(1570)年12月　毛利軍：十神山・本庄・満願寺山など海に面した拠点を奪還

元亀2(1571)年正月　毛利軍：勝久軍が新山城に停泊させていた「大船」を破壊【史料39】

＝勝久軍の本拠に「大船」を停泊させることができる施設が存在

勝久軍にとって制海権を失ったことは致命的といってもよいほど大きかった

【表】尼子勝久による継目安堵とその根拠

No	年	月	日	宛所	安堵内容	根拠	典拠
1	*永禄 12	8	9	瑞泉寺	寺領	経久・**晴久**任判形之旨	『尼』1456
2	永禄 12	8	10	吉田四郎三郎	同名中五人の跡職五千貫分	祖父如宮内大輔故（殿）時	『尼』1459
3	永禄 12	9	6	雲樹寺	雲樹寺	任先規数通証跡	『尼』1473
4	*永禄 12	9	19	国造千家	社領	如**晴久**代	『尼』1480
5	*永禄 12	9	20	神門寺	寺領分役等	如**晴久**代	『尼』1482
6	永禄 12	9	20	大社	大社定燈免	**晴久**判形旨	『尼』1483
7	永禄 12	9	20	鰐淵寺	寺領直江郷・国富荘・同散在分、諸郷のうち坊々経田等	如**晴久**時有御知行	『尼』1484
8	永禄 12	9	20	太田新右衛門尉	伯州大坂八幡宮神主職	数代之判形之旨	『尼』1485
9	永禄 12	10	1	経久寺	経久寺	如前々之	『尼』1493
10	永禄 12	10	1	富兵部大輔	林木橋爪名一名	如前々	『尼』1494
11	永禄 12	10	1	富兵部大輔	大社御領のうち当知行	**晴久**一行之旨	『尼』1495
12	永禄 12	10	1	神主□（雲）四郎	塩冶八幡宮神主職	当知行	『尼』1498
13	永禄 12	10	3	ー(日御碕神社か)	日御崎定灯田	任**晴久**一行之旨	『尼』1499
14	永禄 12	10	6	定光寺	伯州久米郡定光寺	代々判形之旨	『尼』1501
15	永禄 12	10	12	ー（迎接寺か）	寺領	如前々	『尼』1506
16	永禄 12	10	15	神門与三郎	杵築大社大工職	代々筋目以相抱	『尼』1507
17	永禄 12	11	4	吉田彦四郎	室・御供宿・年規買地分田畠屋敷等	如前々	『尼』1516
18	永禄 12	11	13	光徳寺	伯州八橋郡上郷公文名のうち寺領山林	任**晴久**判形之旨	『尼』1521
19	永禄 12	12	1	丹波屋彦兵衛尉	杵築拾六室のうち前々より抱来る分	任先御判形之旨	『尼』1527
20	永禄 12	12	2	喜佐四郎左衛門尉	国富のうち金山散田	従前々抱来之由	『尼』1528
21	永禄 12	12	14	芳蔵主	法勝寺のうち経久寺	前住任譲状之旨	『尼』1532
22	(永禄 12 か)	-	-	浄音寺龍尊	当知行の浄音寺領・宝厳寺領・伊弉諾神宮寺領・能満寺観音分領・佐木之浦	数代之任御判形之旨	『尼』1543
23	永禄 13	4	19	杵築の西彦三郎	当知行分	任当知行之旨	『尼』1593

（年の*印は推定、『尼』＝『出雲尼子史料集』）

このころ、新山・高瀬城から脱走者相次ぐ
←吉川元春：両城の連携を断つため、脱走者をすべて誅伐するよう命じる【史料 40】
元亀 2(1571)年 3 月　高瀬城の米原綱寛が開城・降伏、綱寛は新山城へ送られる
元亀 2(1571)年 5 月　勝久軍：備前浦上氏に使者を派遣するが捕えられ、内情を知られてしまう【史料 41】
元亀 2(1571)年 6 月　毛利軍：勝久軍の隠岐氏・多賀氏を降す【史料 42】
毛利元就死去（74 歳）
元亀 2(1571)年 8 月　新山城陥落【史料 43】　→尼子勝久、隠岐へ脱出
山中幸盛・立原久綱ら勝久軍の主力は因幡・但馬方面へ転戦【史料 44】

(2)第 2 期　因幡・美作転戦期

元亀 4(1573)年 3～6 月頃　隠岐に「牢人衆」の存在【史料 45】・(『尼』1758)
山中幸盛ら、但馬から因幡へ侵攻、隠岐から尼子勝久を迎え入れる【史料 46・47】
天正元(1573)年 9 月　勝久軍、因幡鳥取城を攻略、美作方面への進出をはかる【史料 48・49】
天正 2(1574)年 3 月頃　山中幸盛、因幡私部城を拠点に大友氏や伯耆・美作国人らと連携を模索【史料 50】
11 月頃　山中幸盛、美作高田城の防備を固める【史料 51】
…因幡・美作国境地帯での軍事行動を継続
※このころから史料上に「勝久」より「鹿介（幸盛)」が多くみられるようになる
因幡進出あたりを契機に山中幸盛が勝久軍の主導権を掌握したか
幸盛と他の人物の連署状は元亀 2 年 3 月 11 日付松田誠保宛のもの
(『尼子史料』1714 号）を最後に確認できなくなる
天正 3(1575)年 1 月　但馬の山名氏が毛利氏と全面和睦　…因幡の勝久軍は孤立
3 月　勝久軍：織田信長と接触、協力を仰ぐ【史料 52・53】
ただし信長は表面上は毛利氏と友好関係を保つ【史料 54】
天正 3(1575)年 6 月頃　勝久軍、因幡若桜鬼ヶ城を攻略、拠点を移す【史料 55】・(『尼』1798)
天正 3(1575)年 9 月～10 月　吉川元春・小早川隆景ら、私部城を攻略、ついで高田城を攻略
勝久軍、若桜鬼ヶ城で吉川・小早川軍を撃退【史料 56】
天正 4(1576)年 1 月　播磨の別所・小寺・浦上らが信長に謁見、毛利方と決別
→織田対毛利の戦いが不可避に
吉川・小早川ら対応協議のため因幡を離れ安芸へ帰国
天正 4(1576)年 2 月　将軍足利義昭が毛利氏を頼って備後鞆の浦へ　＝織田・毛利の全面戦争へ
天正 4(1576)年 3 月　羽柴秀吉、吉川元春に山中幸盛を「不可有許容」の由を伝える【史料 57】
天正 4(1576)年 5 月　勝久軍、若桜鬼ヶ城を退去【史料 58】　→京都へ？【史料 59】
…因幡国人の離反や信長勢力との連携模索など、いくつか理由は考えられるが、実態は不明

(3)第 3 期　織田と毛利のはざまで

天正 5(1577)年 10 月　織田信長、山中幸盛への全面支援を表明【史料 60】

このころ、信長から離反した大和松永久秀を攻める軍勢に勝久軍が加わっていたともいう
…所領に基盤を持つ軍隊から、幸盛を中心とする傭兵勢力へと変わりつつあったか

天正 5(1577)年 11 月　羽柴秀吉、播磨上月城を攻略、勝久軍を入れて防備を固める【史料 61】

天正 5(1577)年 12 月　尼子勝久、熊野神社に安堵状を発給【史料 62】
…この段階でもなお勝久軍を支援する勢力が出雲に存在
勝久軍も出雲復帰をあきらめていなかった可能性が高い

天正 6(178)年 2 月　播磨の別所長治が織田方から離反、播磨東部が毛利方に帰属
…前線の羽柴秀吉らが取り残される格好に

天正 6(1578)年 4 月　吉川元春・小早川隆景ら、播磨へ侵攻し上月城を包囲【史料 63】

天正 6(1578)年 5 月　羽柴秀吉・荒木村重ら織田方の援軍が上月城に向かうも救援失敗

天正 6(1578)年 6 月　羽柴秀吉、上月城から撤退

天正 6(1578)年 7 月　上月城落城、尼子勝久自害、山中幸盛敗死　＝尼子家再興戦争（1569～78）の終焉
7 月 8 日付山中幸盛書状【史料 64】
…遠藤勘介に対して他所への奉公を許可　＝幸盛自身が家臣を抱える
勝久軍内部での鹿介の立ち位置は要検討
勝久を支える忠臣？　（経久と同様）自身の才覚で勢力拡大？

おわりに

(1)戦国大名尼子氏の盛衰

時代状況・目標の違い　…経久と晴久・義久を単純に比較することはできない（滅亡時の当主≠「暗愚」）
→晴久・義久期のイメージの更新により、新しい権力像が見えてくる（はず）

(2)尼子勝久・山中幸盛の戦い

「ロマン」ではなく「勝算」、地域勢力からの支援（「雲伯」牢人が勢力の中心）

(3)領主の家の「断絶」と「再興」

「再興」をキーワードとする戦争が 16 世紀後半に継起する（肥前龍造寺・豊後大友・越前朝倉など）
戦いのなかで断絶した家でも近世に（主に家康の計らいで）再興している事例が多くみられる
＝中世末から近世初期を「断絶」ではなく「連続」したものととらえる視角
あるいは、同時代の人々がそうとらえようとしていた、という見方
地域社会にとって、被支配層にとって領主の家が「再興」することの持つ意味とは

戦国時代～江戸時代初期　＝無数の武士の「家」の断絶と再興
…そのなかで勝久・幸盛の「御一家再興」戦争の意義を改めて捉えなおす必要がある

【主要参考文献】

『松江市史 通史編２ 中世』（松江市、2016 年 3 月）
長谷川博史『列島の戦国史３　大内氏の興亡と西日本社会』（吉川弘文館、2020 年 6 月）